



Title	沖縄巡検報告記
Author(s)	三田, 辰彦
Citation	東アジア諸地域における王室儀礼比較史のための国際的研究基盤の構築 王室儀礼関連翻訳論文／調査報告. 2025, p. 169-178
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100677
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第二章：国内での調査

沖縄巡検報告記

三田辰彦

期日：2024年3月13日（水）—15日（金）

参加者：稻田奈津子、榎佳子、伴瀬明美、古松崇志、三田辰彦

2024年3月、沖縄島で琉球王国の史跡および関連施設を巡検した。以下、巡検の報告を行う。なお、掲載写真は報告者が撮影したもので、一部は参加者からご提供いただいた。

2024年3月13日（水）

この日の午前、報告者は航空機で羽田空港から那覇空港へと向かった。到着時には冬コートを着ずに済むほどの暖かい気候だった。

ゆいレールで那覇市の市街地に向かい、ホテルでチェックインを済ませ、研究班の参加者全員が合流する。そのあと昼食を取り、午後は那覇市歴史博物館を見学した。当館では琉球大学の麻生伸一氏、当館学芸員の鈴木悠氏帶同のもと、館蔵の「尚家文書」複製本など各種史料を閲覧した。

【写真1（右図）】



「尚家文書」は琉球王国の王家たる尚家に保管されていた文書や記録類であり、原本は「琉球国王尚家関係資料」の一部として国宝に指定されている（内訳は美術工芸品85点、文書類1207点および文書箱）【那覇市2019】。報告者の関心に即していえば、『周九廟之図并圓覚寺御廟之図』（文書番号23）『御廟制諸書抜書并吟味書』（文書番号24）など、琉球王国の宗廟祭祀に関する議論の記録が目を引いた。特に『五礼通考』など礼制の大型叢書から孫引きで西晋・東晋の議論が引用されたり、恐らく廟制の理解に供するため廟室の配置図も引用したりしていた点が、中国王朝の蓄積してきた礼制を琉球王国がいかに受容したかを具体的に理解するうえで興味深かった。閲覧後は、館内の琉球王国関連の展示物を見学した。

博物館の見学を終え、崇元寺跡に向かった。現地には「旧崇元寺第一門および石牆」と「崇元寺下馬碑」の説明板が設置されている。その説明によると崇元寺は臨済宗の寺で山号を靈徳山という。琉球王国の王廟であり、第二尚氏王統の第三代尚真王の時に建立された。【安里2006：P64】

石門をくぐると、前堂階下にはガジュマルの大木が植わっていた。【写真2（右図）前堂階上からみた石門と階段】崇元寺跡の敷地内は建物がなく、公園として整備されており、学生らしき若者がボール遊びに興じていた。北側には崇元寺伽藍配置模型があり、これ



を見ると現存しているのは石門と前堂下の階段のみであった。また近くには崇元寺跡遺構模型も置かれていた。これは 1982 年・2020 年に崇元寺を発掘調査した際に発見された遺構を再現したものである。説明板によれば崇元寺は沖縄戦で焼失したとのこと。模型をもとに遺構の規模感を把握しつつ、我々は帰路に着いた。那覇市内ホテル泊。

2024年3月14日（木）

午前、予約していた個人タクシー（ワゴン車）に乗り、那覇市の東にある南城市の斎場御嶽に向かう。斎場御嶽の案内所で入手したパンフレットによると、「御嶽とは、南西諸島に広く分布している「聖地」の総称で、斎場御嶽は琉球開びやく伝説にもあらわれる、琉球王国最高の聖地です。また、琉球国王や聞得大君の聖地巡拝の行事を今に伝える「東御廻り」の参拝地として、現在多くの人々から崇拜されています。」とある。聞得大君は琉球王国の神女の最高位の呼称である。【南城市観光協会 2023】

斎場御嶽の見学には入場券が必要なので、南城市地域物産館に附設した入場券売場でチケットを購入する。物産館の館内には聞得大君の聖地巡拝に関するパネルがあり、絵入りで儀礼の様子を説明していた。展示閲覧の後、御嶽入口まで移動する。参観に当たり係員から注意事項を聞き、それから境内を見学した。

入口からほどないところに久高島遥拝所があった。案内板によると「琉球王国の絶対的な存在である国王はまさに太陽であり、その太陽のあがる方向にある久高島は、東方樂土ニライカナイへの「お通し（遥拝）」所として沖縄各地で崇拜されています。」とのこと。



ほどよく晴れていたため、遠方には久高島を望むことができた。【写真3（上図）】

続いて御門口の石段を上る。「ここにある石製の香炉は、御嶽内にある六ヶ所の拝所を表しています。触ることはご遠慮ください。」との注意書きがあった。以下、各処の拝所や器物の前には進入・接触を禁じる注意書きを確認できた。

そこから石畳の道を2、3分ほど登ると、石灰の岩壁の下に大庫理が見える。案内板には「前面にある^{せん}磚敷きの広間では、神女たちが聞得大君を祝福し琉球王国の繁栄を祈りました。」とある。続いて艦砲穴（沖縄戦で撃ち込まれた砲弾の跡地）を経由し、寄満に着く。寄満は厨房を意味していたが、王国時代にはここに国内外の産物が集ったことから「豊穣の寄り満つる所」と理解されていったと言われる。（案内板）

寄満から引き返して東に進むと、三角岩に突き当たった。空間の突き当たりが三庫理、右側がチヨウノハナで、いずれも拝所であった。ただしここは聖域保存のため域内



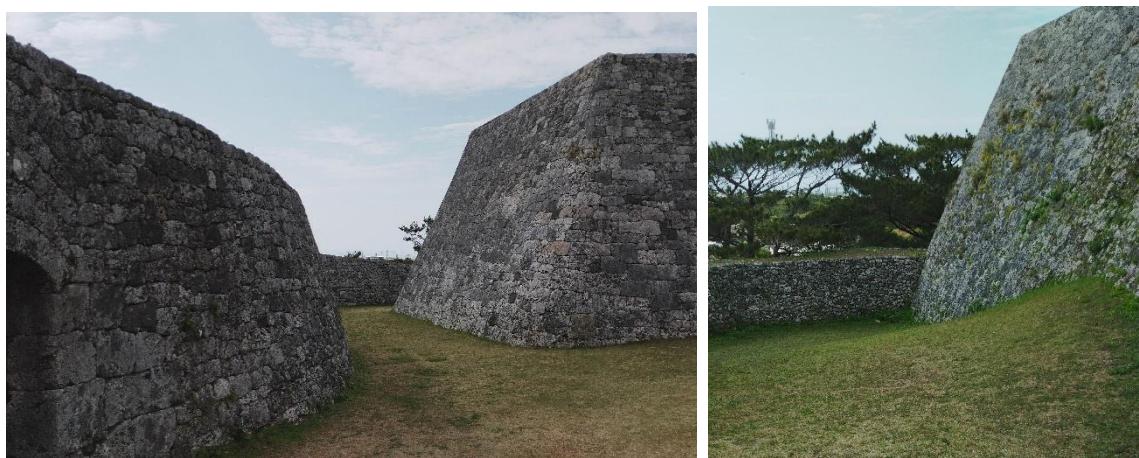
は立入禁止であり、柵の外から様子を眺めるにとどめ【写真4（上図）、奥の突き当たりが三庫理と思われる】、境内参観を終えた。

続いて、途中昼食を挟みつつ、北上して読谷村の^{よみたんそん}座喜味城跡に向かう。まず城址見学に先立ち、世界遺産座喜味城跡エンタンザミュージアムなる資料館の展示物を観覧する。館内には座喜味城跡の模型や城のつくりを示す見取り図があり、便利である。このほか洗骨後の骨を納める厨子甕（ずしがめ、ジーシガーミ）も各種置かれており、翌日の玉陵見学の参考に資した。

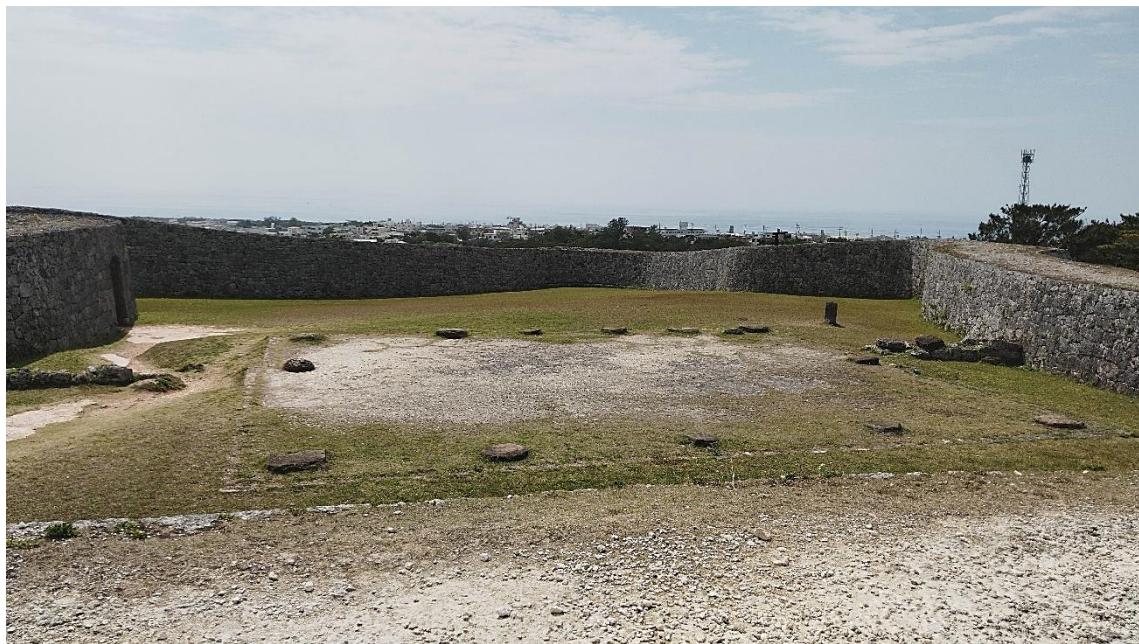
その後、資料館を出て座喜味城跡に向かった。《世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群》のひとつが座喜味城跡である。座喜味城は十五世紀初頭に有力按司の護佐丸によって築かれたという。一の郭（北）と二の郭（南）によって構成され、二の郭から入り一の郭へと移動した。二の郭の城門は二枚の眉石の間に楔石を入れる構造のアーチ門となっており【上里・山本 2019：P90】、パンフレットによればほぼ当時のものを修復したという。城門を入って右手（東）から正面（北）にかけて開けた空間がある。左手（西）には一見すると奥まで移動できそうな通路があるが、やや下り坂になった道を進むと行き止まりになっている。この構造により、侵入した外敵を袋小路にまで追い込んで滅ぼすものと思われる。【上里・山本 2019：P90】防衛面の深慮を垣間見た。一の郭には基壇建物跡と一部の石積みが残されていた。「滑落注意！！」の看板のある階段をのぼると、一の郭の城壁の上から周囲を見渡すことができた。（一部進入禁止区域あり）城跡全域としてみると、複数に巡らされた曲線状の城壁や、小高い丘陵に造営され、周囲より高い位置にあって海浜と山野を両方とも広く見渡せる立地が印象的だった。



【写真5（上左）二の郭の城門、写真6（上右）眉石と楔石の拡大図】



【写真7（上左）二の郭から西側の通路、写真8（上右）通路は袋小路になっている】



【写真9（上）一の郭から基壇建物跡および遠方を眺める（東北から西南）】



座喜味城跡の見学を終え、再び車で1時間ほど南下し、中城村の中城城跡に向かった。中城城は14世紀に先中城按司の一族が基礎を築き、のち護佐丸が1440年に移封されたという。【上里・山本 2019:P93】参加者一同は敷地の入口付近からカートに数分ほど乗って順路の始点まで移動した。この時、一の郭の北西角隅では石積みを解体し積み直す補修工事が行われていた。【写真10(左図)】解説板によると、石積みの下部を支える押え石積みの内側から古い石積みの延長部が発見されたとあり、14~15世紀に何段階かの修築を経ていたことが伺い知れた。

座喜味城跡との対比でいえば、遺構の広さと複雑さが印象に残った。城壁以外に高さを備えた遺構はほとんどなかったが、城郭内を歩いた感触としては全貌が把握しづらかった。合計六か所の城郭が連なっており、しかも座喜味城跡と同様に曲線を多用していることが大きな要因であると思われる。この日の移動経路は、正門→南の郭→一の郭→二の郭→北の郭→ウフガー(大井戸)→北の郭→三の郭→北の郭→裏門で、二の郭から三の郭には直通ルートがない。三の郭・北の郭は護佐丸があとから増築したためであろうか。また、正門は西側にあり、南北方向に配置された一の郭の城門とは一直線で続いてはいない。言い換えると、城郭内に正殿を置きつつも、その正殿から一直線に延びた中軸線が城郭内外を貫くといった構造にはなっていないと見られる。日本中世の城塞や琉球王国のグスクを見慣れていない報告者としては、隋唐長安城に象徴される中国都城のプランニング(中軸線やシンメトリーな配置)とは異なる城郭の配置が新鮮に感じられた。

一方で、座喜味城跡との共通点も見られた。すなわち、周囲より小高い丘陵地にあって、周囲の山野と港湾を城郭から一望できることである。天気がよければ聖地久高島も遠望できそうであった。裏門から記念運動場に出ると北側には模型があり、あらためて城郭の配置と地理的環境を確認し、帰路に着いた。那覇市内ホテル泊。

【写真11(下) 複数の郭が連なる(手前が三の郭、奥が二の郭)】





【写真 12（上） 一の郭の正殿跡から南の郭を望む】



【写真 13（左） 城郭東側は切り立った崖 写真 14（右） 西側の大井戸に続く道】



【写真 15（上） 一の郭から二の郭を望む 三の郭（写真奥）に続く城門はない】

2024年3月15日（金）

巡査最終日となるこの日の午前、バスで移動し、琉球王国の王宮たる首里城跡を目指す。入口近辺にある旧天界寺の井戸を見学してから城跡の各種施設を参観した。

まず、「守禮之邦」扁額を設けた守礼門を通った。守礼門は中国の冊封使が来航した際に出迎えるための坊門である。【上里・山本 2019 : P19】門の近くには目にも鮮やかなブーゲンビレアが咲いていた。続いて、外郭の正門たる歡会門をくぐる。石畳で舗装された道を少し歩くと石段があり、石段の脇には龍樋と名付けられた泉がある。石段を上りきると、その泉に由来する名の瑞泉門に着く。ここが内郭の入り口となる。そこから水時計を置いた漏刻門を通って広福門外前の広場に出る。ここには日影台（日時計）、供屋（案内板によれば使途不明）とその内部に置かれた万国津梁の鐘（いずれも復元）が見られる。なお、外郭の歡会門はアーチ門であるのに対し、内郭の瑞泉門と漏刻門は城壁に直接やぐらを乗せて門としていた。

広福門を通って下之御庭なる広場に入る。このとき広福門内の券売所でチケットを購入した。これは首里城正殿など奉神門より奥の区域を見学するためのものである。広場には首里森御嶽や大龍柱補修展示室などがあった。後者の展示室は、補修された大龍柱（正殿正面の階段前に置かれた龍型の柱）を外側からガラス越しで見学できる。

奉神門前でチケットを見せ、いよいよ首里城正殿に向かう。ここまで説明を省いてきたが、奉神門より奥の正殿など複数の建造物は、2019年10月31日に起きた火災によって焼失してしまった（前述の大龍柱は辛うじて残った）。参観当日はなお復元工事中で、正殿および殿前の広場たる御庭はプレハブで囲まれていた。とはいえ、復元に際しては「見せる復興」をテーマにしており、プレハブには木材置場・加工場までもが外から見られる素屋根見学エリアが設けられていた。プレハブは3階立てで、各階とも見学デッキが設営され、ガラス越しに修復工事の様子が一部伺えるようになっている。デッキには焼け落ちた瓦なども展示されていた。仮設の建物で工事する理由を記したパネルもあり、その説明によれば台風も多い沖縄では雨風をしのぐために建物内での修復が必要であるとのことだった。

【写真16（下）瑞泉門階下からプレハブ（写真中央）を望む】

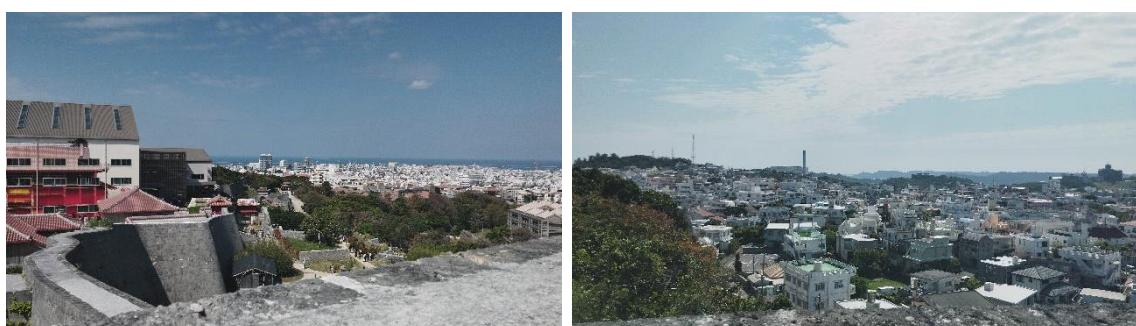


【写真 17（下）素屋根見学エリア3階 正殿屋根の修復の様子が伺える】



プレハブを出て、「後宮」空間に移動する。王女の居室にして即位の儀式を行う場にもなるという世誇殿がある（外観のみ見学可能）。続いて休憩スペースもある首里城復興展示室に移り、修復活動に関するパネルを見る。平成の復元以降に得られた新知見をもとに変更されるものもあることを知る（正殿扁額の地板の色を変更する、など）。小休憩ののち、展望台へと向かう一方通行の石段を上りつつ、井戸状貯水遺構、拝所の一つである御内原ノマモノ内ノ御嶽（ウチアガリノ御イベ）、白銀門・寝廟殿跡を見学する。その後、城郭の最奥部（東側）に築かれた展望台たる東のアザナから周囲を一望した。穏やかな晴れ間のなか、眺望を終えて淑順門、右掖門を経由して久慶門から首里城外へ出た。

首里城も小高い丘陵に造営されており、東のアザナからは旧城下町の地域や那覇の港湾を見下すことができるうえ、展望地点によっては斎場御嶽や中城城跡と同様に久高島を遠く望むことができる。また城郭の敷地内に複数の御嶽を囲い込んでいる点も中城城跡と共通していた。首里城が政治・経済・祭祀を総合的に考慮した立地条件を具えていると体感できたのは、報告者としては新たな収穫であった。



【写真 18（左）東のアガリから海浜を望む 写真 19（右）久高島方面を望む】

その後、首里城跡のふもとにある円覚寺跡（第二尚氏王統の菩提寺）、閑静な住宅街の裏手にたたずむ天王寺跡（王妃が祀られた寺）を見学し、昼食休憩をとる。

午後は第二尚氏王統の陵墓たる玉陵の参観に向かう。まずは玉陵奉円館なる資料館で遺物や玉陵関連パネルを見物する。各王の遺骨を収めた蔵骨器の様子、玉陵の被葬者、墓室の内観などを知ることができた。その後、玉陵外側の石門をくぐってサンゴ砂利の敷かれた広場を通り、内側の石門をくぐって墓室のある空間に移動した。玉陵には東室・中室・西室の計三基の墓室がある。資料館のパネルによると中室は原則的に洗骨前の遺骸を安置する場所であり、東室は国王・王妃の厨子（蔵骨器）、西室には一部の王子・王女の厨子が置かれたという。墓室はいずれも板ぶき屋根を模した石製の屋根で覆われており、敷地の外側は石壁で囲まるなど、首里城を彷彿させるつくりとなっている。なお、このとき近隣の高校生と思しき集団も来訪しており、課外活動の一環であろうか、学生の代表者が玉陵ガイドをしていた。

【写真 20（下） 玉陵（左手が東室、右手が中室）】



玉陵参観後は、首里城と各地を結ぶ官道のひとつであり、ごく一部が現存する真珠道、首里金城町の石畳道を下り、巡検を終えて帰路に着いた。

今回の巡検を振り返ると、〈石〉を目にする機会が多かった。グスクや王宮の城郭、王陵の墓室や石碑、古道の石畠など石製の遺構・遺物はもちろんだが、丁字路に置かれた石敢當や車の移動中に目にした亀甲墓など、身近に石造物がある環境のように思われた。また斎場御嶽のように自然の岩壁を利用した拝所も印象的であった（グスク内の御嶽も石垣で囲ま

れるものが多かった)。石造物の多い要因としては、長期にわたり堆積したサンゴ礁が琉球石灰岩の地層を形成し、地層が隆起した台地・丘陵にグスクが建てられたこと、建材として石灰岩が比較的加工しやすいことが知られる。【上里・山本 2019 : P iii】今回実地に調査することであらためて石造文化の一端を感じ得することができたのは貴重な成果であった。

日程の都合もあり、首里以前の王城たる浦添グスクや琉球王国の孔子廟たる久米至聖廟の見学には至らなかった。また首里城も順調に修復が進めば 2026 年秋に正殿復元が完成する予定とのことである。今後の再訪の機会を待ちたい。

【参考文献・URL】

安里進『琉球の王権とグスク』、日本史リブレット 42、山川出版社、2006 年

上里隆史・山本正昭編著『沖縄の名城を歩く』、吉川弘文館、2019 年

那覇市 HP > トップページ > 市長室 > 記者会見 > 2018 年度 > 【3 月 20 日】「尚家文書」の国宝追加及び「伊江御殿家関係資料」の重要文化財指定について (2025.1.5 閲覧、最終更新 2019.3.22)

https://www.city.naha.okinawa.jp/websyuccyoujyo/kaiken/kaiken/kaiken0320_2.html

南城市観光協会『斎場御嶽』(パンフレット) 南城市、2023 年改正版

全国遺跡報告総覧 HP > 那覇市市民文化部文化財課編集『那覇市文化財調査報告書 120 : 崇元寺跡』那覇市、2024 年 (2025.1.5 閲覧) <https://sitereports.nabunken.go.jp/139496>

読谷村観光協会 HP > 歴史・文化・芸能 —Culture— > 歴史 (2025.1.5 閲覧)

<https://www.yomitan-kankou.jp/culture/#history>

那覇市観光資源データベース HP (2025.1.5 閲覧) <https://www.naha-contentsdb.jp/>